

就労する母親の「ママ友」関係の形成と展開 ——専業主婦との比較による友人ネットワークの分析——

實川慎子^{1)*} 砂上史子²⁾

¹⁾昭和学院短期大学・人間生活学科 ²⁾千葉大学・教育学部

Formation and development of working mothers' *mama-tomos*:
A comparison of the friendship networks of mothers who do and do not work outside the home

JITSUKAWA Noriko¹⁾ SUNAGAMI Fumiko²⁾

¹⁾Faculty of Human Life, Showagakuin Junior College, Japan

²⁾Faculty of Education, Chiba University, Japan

本研究は、専業主婦の母親との比較から就労している母親の友人ネットワークの特徴を明らかにした。その結果、①就労する母親が「ママ友」と出会う場所や数は専業主婦と同様である。②保育所よりも幼稚園の方が「ママ友」ネットワークを形成しやすい。③職場の友人ネットワークは、専業主婦の母親は退職後に途切れやすいが、就労している母親は継続する。④就労している母親は、専業主婦ほど「ママ友」を求めないが、代わりに「子育て」と「就労」の両立にかかわる情報提供や共感できる相手を求めている。⑤専業主婦の友人ネットワークは、妊娠・出産を機に「希薄期」「移行期」「拡大期」をたどるが、就労している母親は、「ママ友」ネットワークが復職や再就職によって中断しやすく、復職や再就職後に「再移行期」「再拡大期」を迎える。子育て支援では、これらの母親の就労状況によるネットワーク形成の違いに応じた支援が必要になる。

This study compared the characteristics of the friendship networks of mothers who do and do not work outside the home. The following five major results emerged from our data: ①The *mama-tomos* of both groups of mothers were similar in number and location. ②*Mama-tomos* were more easily established by mothers of kindergarteners than by mothers of nursery school students. ③ Mothers who do not currently work outside the home were less likely to maintain contact with the friendship networks associated with their previous places of employment, whereas mothers who continued to work outside the home tended to continue to participate in such networks. ④ Mothers who worked outside the home did not seek to include stay-at-home mothers in their *mama-tomos*, but rather sought individuals who could provide education and sympathy about their simultaneous engagement in child care and work outside the home. ⑤The friendships network of stay-at-home mothers followed pattern of “the low-destiny” after pregnancy, “shift,” and “expansion.”. Mothers who had worked outside of the home prior to giving birth were able to easily withdraw from a *mama-tomo* network upon reemployment, welcome the “re-expansion period” after reinstatement and reemployment, and enter the “re-shift period”. It is important to recognize the different friendship needs of mothers who do and do not work outside of the home while they are caring for young children.

キーワード：「ママ友」(*Mama-tomo*) 就労状況 (employment status)
就労している母親 (mothers who work outside the home)
専業主婦の母親 (mothers who do not work outside the home)
友人ネットワーク (friendship network)

問題と目的

1. 「ママ友」の特徴

現在、「ママ友」という言葉が普及し、テレビや雑誌等でも一般的に使われている。「ママ友」とは、「子どもを通じて知り合った母親仲間」(中尾・原田, 2010)で母親同士の友人関係(荒牧・無藤, 2008)をさす。母親にとって、「ママ友」との関係はサポート的な面を持

つ。母親は「ママ友」から子育て情報を得たり、子育てに対する安心感を得たりしている(中村, 2006)。友人関係の本質は、同等であるとみなしている相手との互恵性と(reciprocity)と積極的関わり(commitment)にある(Hartup, 1992)。つまり母親にとって「ママ友」は、横並びの関係であり、お互いにサポートする、身近で気軽な子育てのサポート源である。しかし、その一方で、「ママ友」は、通常の友人関係とは異なり、子どもを介した間接的な関係がベースになるという特徴を持つ(宮木, 2004)。そのため、「ママ友」付き合いは、“子

*連絡先著者：實川慎子

どものため”に気を使って付き合う等、葛藤が生じやすく(實川・砂上, 2009), インターネットの相談(ヤフー知恵袋, 2011) サイトや主婦向け雑誌(梅木, 2010)などで、「ママ友」付き合いに関する悩みが取り上げられることも多い。

2. 母親の就労状況による「ママ友」関係の違い

就労する母親と専業主婦の母親とでは、妊娠・出産から就学前までのライフコースが異なる。したがって、母親の就労状況によって「ママ友」関係も異なる。専業主婦と就労する母親では「ママ友」に期待する「同質感」(實川・砂上, 2011) や、ネットワークの形成が異なる(實川, 砂上, 2010) ことが明らかになっている。以下にそれらの違いを具体的に述べる。

(1) 「ママ友」に期待する同質感の違い

「ママ友」関係では、相手に“自分と同じように感じる”という「同質感」が重視されるが、相手に期待する同質感は専業主婦と就労する母親とでは異なる(實川・砂上, 2011)。専業主婦の母親は、「ママ友」に「親役割の同質感」の高い相手を求める。「親役割の同質感」とは、“親同士として自分と相手と同じ、または似ている”と感じることをさす。たとえば母親は、相手との関係において“子ども同士が同年齢”“子どもの幼稚園が一緒”“しつけの仕方が似ている”ことなどに注目する。同年齢の子どもを持つ親同士は、子育てをする中で経験や必要とする情報が似ており、それらの同質感の高い相手とは共感しやすいと考えられる。

これに対して、就労する母親は、就労している時間が長く、子どもと一緒に「ママ友」と会う時間は短く頻度も少ない。就労する母親は「ママ友」に「親役割の同質感」の高い相手よりも、“自分と同じように仕事をしている”かどうかという、「就労の同質感」の高い相手を求める。就労する母親の「ママ友」関係は接触する頻度や時間の長さなどから専業主婦と異なり、人間関係が深まりにくい、葛藤も生じにくいという特徴がある。

(2) 「ママ友」ネットワークの違い

就労状況による違いは、「ママ友」ネットワークの広さや活用の仕方にも影響し、就労状況によってネットワークの広さが異なる。専業主婦の母親は、「ママ友」ネットワークが広いが、就労する母親は、「ママ友」ネットワークが狭く子どもを預けることが可能な親族とのネットワークを特に重視する(松田, 2008)。育児休業中に形成された母親同士の「ママ友」ネットワークは、復職後は中断され、就労する母親は他の母親と交流する時間が短くなり「ママ友」関係を形成しにくくなる(實川・砂上, 2010)。

また「ママ友」を含むネットワークの活用においては、専業主婦の母親は急用の時には夫や親族、友人などを頼り、情報入手には自主保育グループや習い事の仲間を利用する。一方の就労する母親は職場の人を精神的な支えとしている(亀山, 1986)。

(3) 「ママ友」と他の友人ネットワークとの関連

母親の友人ネットワークには、「ママ友」だけでなく、学生時代の友人など妊娠・出産前から付き合いのある友人も含まれる。専業主婦の母親の場合、妊娠・出産を機

に友人ネットワークが大きく変化する。学生時代の友人とは妊娠・出産後もメールや年賀状などのやりとりを続けるが、妊娠・出産を機に接触頻度は減少する。代わりに、「ママ友」との出会いが増え、「ママ友」ネットワークが拡大していく(實川, 2010)。学生時代の友人など「ママ友」以外の友人と、子どもの誕生と成長に伴って新たに形成された「ママ友」は、共に、母親の学生時代からの友人ネットワーク全体の展開過程のなかに位置づけられる。

以上から、母親の就労状況の違いによって「ママ友」に期待する同質感やネットワークの広さや活用が異なり、「ママ友」は「ママ友」以外を含む友人ネットワーク全体のなかで捉えられるといえる。しかし専業主婦に関しては、實川(2010)の先行研究で、学生時代の友人を含めた友人ネットワークの展開過程を示しているが、就労する母親の友人ネットワークは明らかにしていない。

そこで、本研究では、学生時代から妊娠・出産後、子どもの就学前までにおける就労する母親の友人ネットワークの形成と展開を明らかにすることを目的とする。その際に専業主婦の母親の友人ネットワーク(實川, 2010)との比較を行い、就労状況による友人ネットワークの違いに対応する子育て支援についても検討する。

方 法

協力者

就労する母親(20~40代)で、幼稚園に通う子どもの母親1名、保育所に通う子どもの母親5名に、知人を介して協力を依頼した。調査時点での就業形態は、常勤4名、パートタイマー(週5日8時間勤務)1名、自営1名である(表1参照)。協力者は全て教員などの有資格専門職であった。本研究は専業主婦(9名)の調査(實川・砂上, 2009; 實川, 2010)に続けて実施したため、協力者の仮名はJ~Oで示している。

調査時期

調査は2009年2月~2009年6月に実施した。

調査方法

協力者の希望する場所(自宅、飲食店など)にて、半構造化面接によるインタビューを行った。面接所要時間は1人平均およそ90分である。協力者が希望する場合は、子どもも同席した。面接では、協力者が友人関係を評価されていると感じないように十分配慮し、協力者が話しやすいように努めた。面接を始める前に、協力者に研究目的や個人が特定されることのないよう改編することなどを丁寧に説明し、了解を得た。面接内容はメモを取りながら録音し、後日逐語録を作成した。

主な質問内容として、妊娠・出産後の友人について、出会った場所や話す内容、メール交換の有無、具体的な付き合い方などを尋ねた。例えば「お友だちと実際にどんなことをしていますか?」などと質問した。また妊娠・出産前の友人についても、具体的な付き合い方などを尋ねた。

表1 協力者プロフィール

協力者	J	K	L	M	N	O
出産前の就業形態	常勤	常勤	常勤	常勤	常勤	自営
現在の就業形態	パートタイマー	常勤	常勤	常勤	常勤	自営
離職・復職形態	退職・再就職	退職・再就職	育休・復職	育休・復職	育休・復職	育休・復職
離職期間 (育児休業期間または退職から再就職までの期間)	1年	2年	5年5ヵ月 (第1子第2子継続)	第1子:1年 第2子:2年6ヵ月	11ヵ月	11ヵ月
子どもの年齢	第1子:1歳5ヵ月	第1子:4歳	第1子:5歳11ヵ月 第2子:3歳5ヵ月	第1子:9歳 第2子:5歳	第1子:5歳	第1子:6歳
子どもの保育施設	保育所	保育所	幼稚園・保育所	幼稚園・保育所	保育所	幼稚園

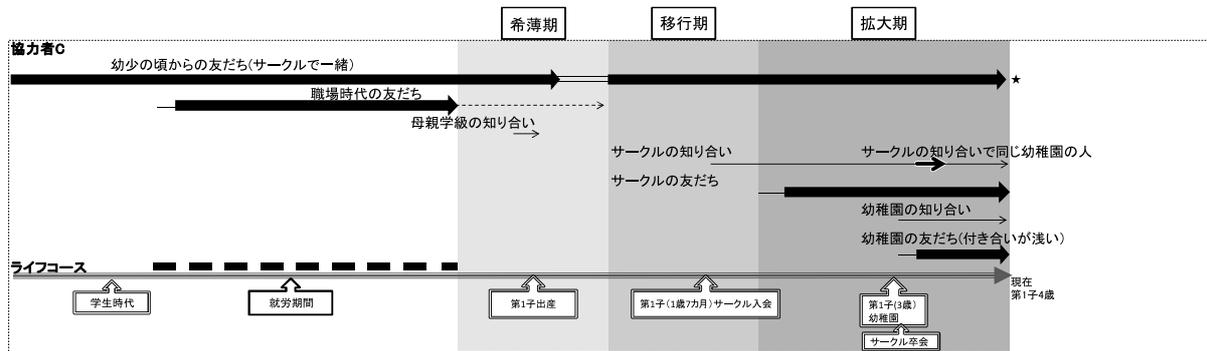


図1 専業主婦の協力者Cの友人ネットワーク (實川, 2010)

分析方法

インタビューから得られたデータは、母親の友人ネットワークの形成と展開に焦点を当てて図示化した。具体的には、妊娠から子どもの就学前までの母親のライフコースを左から右へ伸びる横向きの矢印で表し、それと併行して、母親の友人関係の形成と継続を矢印で示した。母親のライフコースを矢印で表すことにより、個々の母親が時間の経過の中で、友人ネットワークをいつ、どのように形成し、展開しているのかを捉えることが可能となるからである。各協力者は、それぞれ固有のライフコースをたどっており、友人関係の形成と展開においても個別性を有する。本研究では、協力者ごとに友人ネットワークを図示化し、専業主婦の母親の友人ネットワーク(實川, 2010)と比較した。図1はその比較に用いる専業主婦の例(實川, 2010)である。協力者Cは、調査時点で第1子が4歳であり、子どもの数が1人であった。本研究の協力者の子どもの平均年齢4.9歳に近く、本研究の協力者のうち3分の2が調査時点で第1子のみであったため、實川(2010)から協力者Cの図を再掲した。

結果と考察

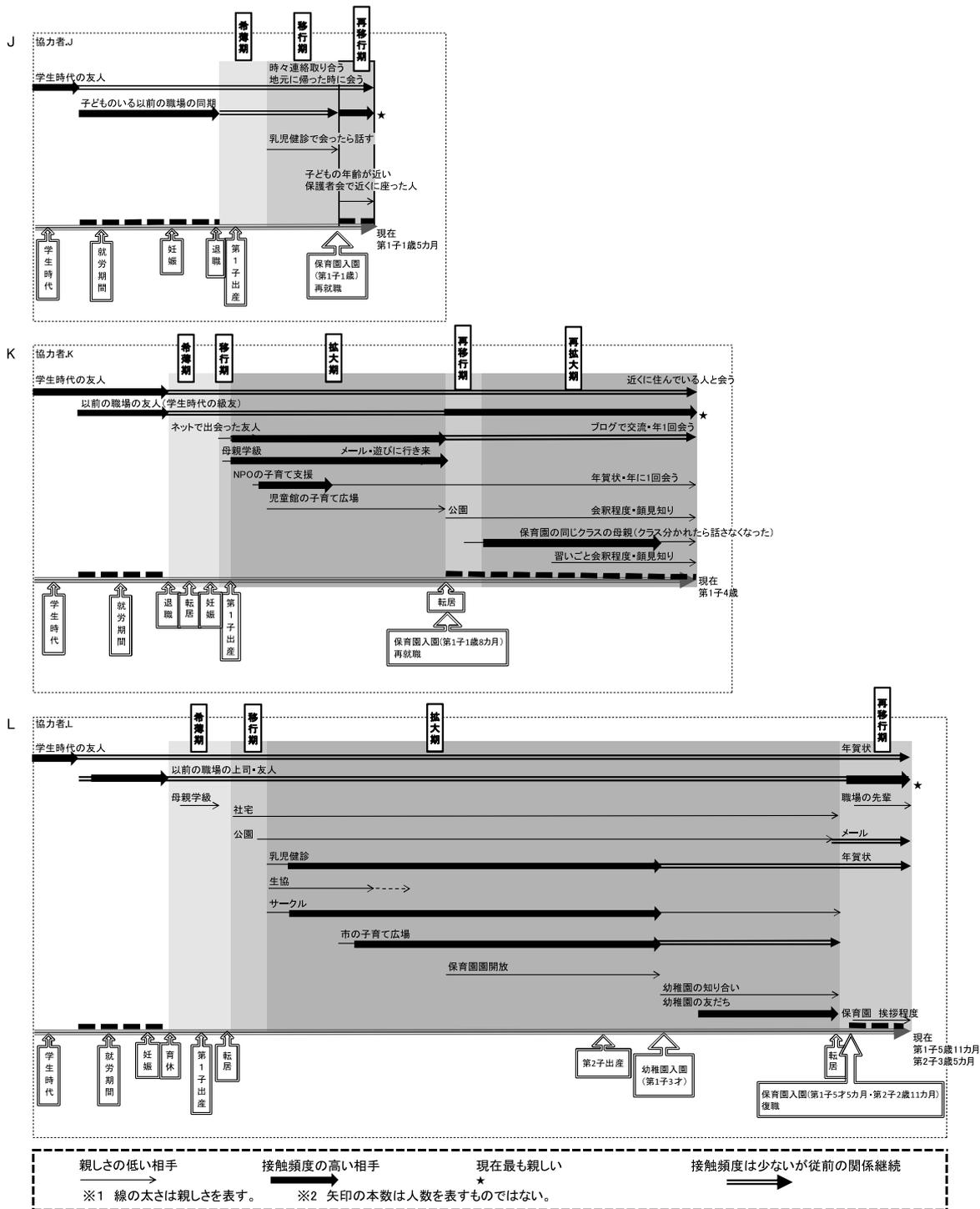
1. 就労する母親の友人ネットワークの図示化

各協力者の友人ネットワークの形成と展開について、図2(J~O)に示す。妊娠から現在までの母親のライフコース上に、就労、出産、退職、育児休業、転居、子どもの入園などの主要なライフイベントを示した。子どもの年齢は語りで確認できる範囲で記載した。

①学生時代および第1子出産前までの就労期間 学生時代と第1子出産前までの就労期間の長さは、本研究が主に妊娠・出産から子どもの就学前までの期間を対象としていたことから、とくに母親に質問しなかった。そのため、図2の学生時代と第1子出産前までの就労期間は、どの母親も同じ長さで示している。また図2に学生時代と就労期間を図示したのは、母親の友人関係が妊娠・出産前から継続しているものを含んでいることを示すためである。なお、第1子出産後の就労期間は、実際に母親の語りから確認された就労期間を図示した。

②妊娠・出産による退職・離職期間 全ての協力者は、出産前に退職するかまたは育児休業を取得し、妊娠・出産を機に一時職場を離れていた。図2では、就労期間を母親のライフコース上に点線で示し、退職または育児休業取得後、再就職または復職までの期間を「離職期間」として示した。なお、本研究では、職場を辞めている場合を「退職」、出産後に新たな職場に就職することを「再就職」、職場を辞めずに育児休業を取得し、育児休業後に職場に戻ることを「復職」とする。また出産時に「退職」あるいは「育児休業取得」後、「再就職」または「復職」するまで職場を離れていた時期を「離職期間」とする。

退職・離職時期について、妊娠前に退職したのは協力者Kのみであり、他の協力者は全て妊娠後に、退職または育児休業に入っていた。現在は、全ての協力者が就労しているが、出産後の職場は、出産前と同じ職場に戻る(以後、「復職」とする)母親(協力者M・N)と、出産前の職場とは異なる新たな組織で働く(以後、「再就職」とする)母親(協力者J・K・L)がいた。なお、



協力者Oは自営のため、これに該当しない。

③友人の親しさの違い 友人ネットワークは、母親が“親しい”“仲がいい”など親しい相手と捉えるほど太い線(⇒)で表し、“挨拶程度”“顔見知り”などは、細い線(→)で表した。また、母親が“その時だけ”“今は付き合いがない”と語った場合は、非継続と判断し、線を区切った。

④友人との接触頻度の違い 学生時代の友人や出産前の職場の友人とは“たまにメールをする”“年賀状をやりとりする”など、接触頻度は少ないが、母親が相手を“友だち”として捉えている場合は、友人関係が継続し

ているとして、二重線(⇔)で表している。線は相手と出会った場所に応じて作成し、同一の場所において親しさの違いが語られた場合は、太さの違う線を作成した。例えば、幼稚園で“知り合い”と“友だち”など親しさの異なる関係が語られた場合は、それぞれ異なる線で示した。そのため、線の本数は友人の数そのものではない。

⑤最も親しい友だち 母親が現在最も親しいと捉えている相手に星印(★)を付けた。

就労する母親の「ママ友」関係の形成と展開

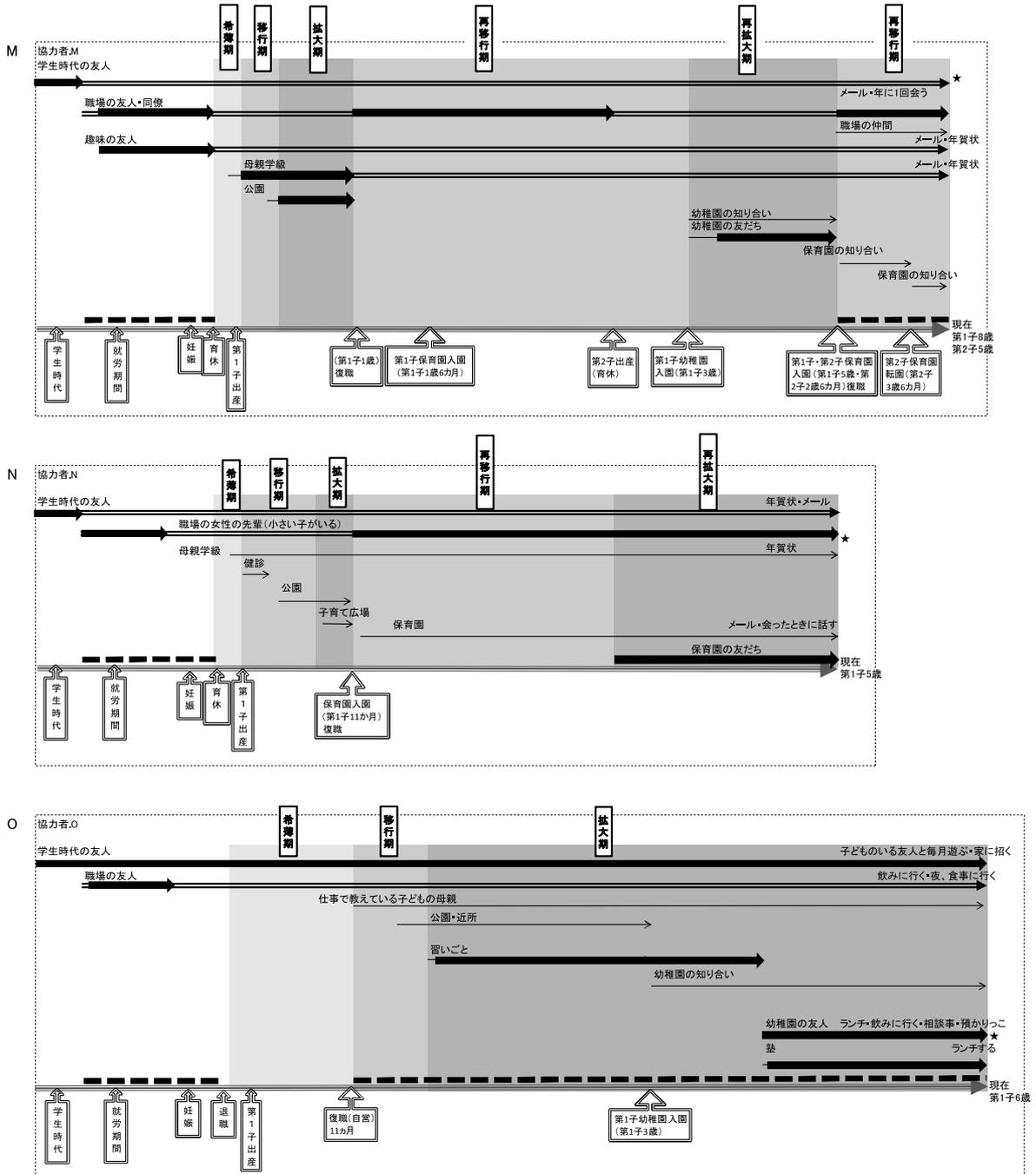


図2 就労している母親の友人ネットワーク (M~O)

2. 就労する母親の「ママ友」ネットワーク

(1) 「ママ友」と出会う場所

協力者J~Oが妊娠・出産以後、就学前までに友人と出会った場所は、母親学級、乳幼児健診、公園、子育て支援のひろば、子育てサークル、保育所・幼稚園など子どもの出産や成長にかかわる場であった。図1の専業主婦の協力者Cも同様に、母親学級やサークル、幼稚園で「ママ友」と出会っており、就労状況によらず妊娠・出産から就学前までに「ママ友」と出会う場所は、子どもの出産や成長にかかわる場であるといえる。

(2) 離職期間の長さによる「ママ友」ネットワークの違い

離職中の母親同士の出会いの場の数は、平均5.6ヶ所で、専業主婦の平均5.1ヶ所(實川, 2010)と大きな違

いはなかった。離職期間中は、「ママ友」のネットワークが多く形成され、専業主婦と似ている。しかし一方で、母親の離職期間の長さによって、友人ネットワークを形成した場の数が異なっていた。離職期間が長い母親ほど、離職期間中に「ママ友」とのネットワークを形成した場の数が多かった。図2から離職期間は平均2年4カ月で、離職期間最長(5年)の協力者Lは「ママ友」と出会った場の数が9ヶ所、離職期間最短(11ヶ月)の協力者Nは4ヶ所だった。このように離職期間が長い方が出会いの場が増える理由として、子どもと過ごす時間が長い方が、子どもと一緒に子育てひろばや児童館へ通う機会が多くなり、それらの場で「ママ友」とのネットワークを形成しやすくなることが考えられる。

(3) 幼稚園と保育所における「ママ友」ネットワークの違い

子どもが通う施設が幼稚園であるか保育所であるかによって、就労する母親が「ママ友」ネットワークを形成する場の数に違いがあった。子どもが保育所に通う母親（5名）（協力者J・K・N、LとMについては保育所通園期）は、「ママ友」ネットワークの場の数の平均は2.8であり、親しい「ママ友」とのネットワークの場の数（図2の太い線）の平均は0.4だった。他方、子どもが幼稚園に通う母親（3名）（協力者O、LとMについては幼稚園通園期）は、「ママ友」ネットワークの場の数の平均は4.3、親しい「ママ友」とのネットワークの場の数の平均は1.3であった。これは図1の専業主婦に近い。図1の専業主婦の協力者Cは、第1子が幼稚園に入園後の「ママ友」ネットワークの場の数は5.0で、親しい「ママ友」ネットワークの場の数は3.0だった。専業主婦の協力者Cは幼稚園の入園までに友人ネットワークの「拡大期」を迎えていた。協力者Cは、妊娠・出産後に母親学級やサークルなどで「ママ友」ネットワークを形成し、親しい「ママ友」と出会っていた。一方、本研究の協力者L・Mは、共に幼稚園と保育所の両方に子どもを通わせた経験がある。図2において、協力者L・Mは、保育所に比べて幼稚園の方が「ママ友」付き合いが活発であり、複数の親しい「ママ友」がいた。それに比べて協力者L・Mは保育所での付き合いを、「顔見知り」「知り合い」と捉えていた。たとえば協力者Mは幼稚園の「ママ友」との付き合いを断りづらい雰囲気があったと語っている。「幼稚園のお母さんて、集まることに対するエネルギーが違う気がして。みんなでお茶飲むとか、子どもを遊ばせるとかって、表面的にはさらっとしてるような感じだけれど、あの人の方が来るとか来ないとか（が話題になる）」と語っていた。母親個人が就労しているかどうかによるだけでなく、その施設に通園する母親に専業主婦が多いか、就労している母親が多いかによっても、「ママ友」ネットワークの形成のしやすさが異なることが示された。これは、母親同士が会って話す頻度や子どもと共に過ごす時間の長さによると考えられる。専業主婦の母親は、子ども同士を遊ばせるために幼稚園以外にも子ども連れで会ったり、子どもが幼稚園へ行っている間も「ランチする」（實川，2010）など、母親同士で交流する機会がある。そのため、より多くの「ママ友」と出会い、より濃い付き合いになりやすいと考えられる。

3. 就労する母親の「ママ友」以外の友人ネットワーク

(1) 妊娠・出産以前の友人ネットワークの継続

図2に示すように、どの協力者も「学生時代の友人」と出産前の「職場の友人」ネットワークが継続していた。これは、図1の専業主婦の「学生時代」の友人ネットワークが接触頻度は減少するものの現在まで継続することと同様である。協力者Oを除く、他の協力者は、学生時代の友人と頻繁に会うことはできないが、メールをしたり、年賀状をやりとりしたり、年に数回会うなどしていた。協力者Mは、「長く連絡を取らなくても大丈夫っていうひとがお友だち（だと思う）」と語っていた。このような就労する母親の「学生時代の友人」との付き合い方は、

専業主婦の「学生時代の友人」（實川，2010）と同様である。

これに対して、「職場の友人」ネットワークは、就労状況によって継続の有無が異なっていた。本研究では全ての協力者において職場の友人ネットワークが継続していたのに対して、専業主婦の母親は、9名中6名の母親において継続していなかった（實川，2010）。また就労している母親は「仕事の話」を就労している「学生時代の友人」にも話しており（協力者J・K・M・N・O）、就労している母親にとって「仕事の話」のできる相手とのネットワークが重要であることが示唆された。

(2) 「退職して再就職」か「育児休暇を取得して復職」かによる「職場の友人」との付き合いの違い

出産前の職場の友人ネットワークは、「退職して再就職」した母親（協力者J・K）も「育児休暇を取得して復職」した母親（協力者L・M・N・O）も、ともに継続していた。再就職した母親（協力者J・K）は、現在の職場では友人関係を形成していなかったが、出産前の職場の友人関係を継続していた。新たな職場に再就職すると、出産前の友人との交流頻度は低減するが、メールをしたり（協力者K）、年に数回食事に行ったり（協力者J・K）して関係を継続していた。出産前の職場の友人は、学生時代の友人と同様に、接触頻度は減少するが親しい友人であると捉えられていた。出産前の職場の友人との関係は、妊娠・出産後の母親にとっての学生時代の友人と同様に、「毎日のように顔を合わせる友人関係と異なり、相手との衝突や関係の悪化が生じる恐れが弱い」（丹野，2007）と捉えられるため、安定した友人ネットワークとなると考えられる。

一方、「育児休暇を取得して復職」した母親（協力者L・M・N・O）は、出産前と同じ職場に復職するため、出産前からの友人関係を継続しやすく、子育ての大切なサポート源となっている。たとえば協力者Nは「会社で話をするのも、割と子どもの話を中心ですかね、女性の先輩と話したり」と語っていた。しかし復職後の友人付き合いの仕方は、子どもがいることによって、出産前と比較して大きく変化する。「食事に行くのは激減（協力者N）」し、「会社の中でちょっと手が空いた時とか、お昼休みとかに話をする程度（協力者N）」となる。協力者Nは「（食事には）全然いけないです。誰が（子どもを保育所へ）迎えに行くんだって話がどうしてもありますので、夫の都合と合わない（行けない）」と語っていた。このように、「育児休暇を取得して復職」した母親の職場の友人との付き合い方も、復職後は子どもがいることで制約を受ける。これは専業主婦の母親が「幼稚園の用事」や「子どもの体調のことで外出を控える」など、子どもがいることによって友人付き合いを制約される（實川，2010）のと似ている。

(3) 「子育てしながら就労する同質感」

協力者の3分の2にあたる協力者J・K・L・Nが復職・再就職後に最も仲のよい友人として以前の職場の友人や今の職場の同僚・先輩を挙げていた（図2の★を参照）。そのうち相手にも子どもがいる「ママ友」関係は、協力者L・Nであった。「職場の友人」付き合いにおいて、協力者は「仕事の話（協力者K・L・N）」や「子

どもの話（協力者J・K・L・N）をすると語っていた。たとえば協力者Lは“家族の悩みというか、子どもをこれから保育園に預けるとか、学童とかどうしたらいいかという相談に乗ってくれて”と語った。就労する母親にとって「職場の友人」は、就労する母親に共通する「就労しながら子育てをする」という課題に共感し、有用な情報を提供してくれる相手であると考えられる。このことから“仕事の話”をすることは、単に相手と仕事の話話を共有するという目的以外に、互いに「子育てしながら就労する者同士」であるという「子育てしながら就労する同質感」を共有していると考えられる。たとえば協力者Kは、妊娠後にインターネットで知り合った友人と“仕事の話”をしていた。“殆どみんな育児、子どもの成長とかこんなことがあった。あと、仕事をされているひとも多いので仕事の愚痴とかも（ブログに）書いてあります”と語っていた。

就労している母親が職場の友人関係を重視するのは、「就労の同質感」の高い相手を求めるためと考えられる（實川・砂上, 2011）。これは、専業主婦が「親役割の同質感」の高い「ママ友」ネットワークを重視する（實川, 2010）のとは大きく異なる。むしろ就労する母親は、専業主婦ほど「親役割の同質感」の高い「ママ友」を求めようとしないと考えられる。たとえば、協力者Mは、“そんなにお母さん同士っていいのではないです。子ども主体で付き合うっていうより、個人的な気持ちで付き合いいたいってのがあるんですかね？やっぱり、お母さん同士が仲良くなっても、子ども同士が仲良くなるのは別じゃないですか？”と語っていた。

しかし、就労する母親も、育児休業中など離職期間中は、専業主婦と同様に「親役割の同質感」の高い相手と「ママ友」付き合いをする。協力者Mは、育児休業中での公園の「ママ友」付き合いについて“「ブランコに乗れるようになったね」から始まり、「夜よく寝れる？」とか、「うちに遊びに来る？」っていうのもたまにあったかな”と語っていた。子どもが同年代の母親同士が、子どもの話をきっかけに交流を深めていく様子は、専業主婦の「ママ友」付き合いと同様である（實川・砂上, 2010）。

4. 就労する母親の友人ネットワークの展開

専業主婦と就労している母親では、友人ネットワークの展開に違いがみられた。専業主婦の母親の友人ネットワークは、「希薄期」「移行期」「拡大期」という3つの時期をたどって変遷していくことが明らかにされている（實川, 2010）。図1の専業主婦の例のように、まず出産後に一時的に出産前の友人とも、新しい友人とも接触が希薄になる時期がある（「希薄期」）。その後、子どもの成長に伴い、子どもを連れて「ママ友」と出会い、新しいネットワークが形成される（「移行期」）。さらに、同時に複数の場所で複数の「ママ友」とのネットワークを拡大していく（「拡大期」）。

本研究では、協力者Oは、自営のため保育所を利用せずに復職が可能であり幼稚園に通園している。友人ネットワークは、専業主婦と同様に、「希薄期」「移行期」「拡大期」を順番にたどっていた。しかし、他の就労している母親のうち、5名中4名（協力者K・L・M・N）は

復職以前（育児休業中）には、図1に示す専業主婦と同様に「希薄期」「移行期」「拡大期」をたどったものの、復職後は育児休業中に形成した友人ネットワークに中断や疎遠がみられ、その後保育所などで新たな母親同士の付き合いが始まっていた。（図2—K・L・M・N参照）。このように「ママ友」付き合いはあるが、拡大したネットワークが疎遠になったり、中断したりする時期を「再移行期」、その後新たな友人や以前の付き合いが復活する時期を「再拡大期」と捉えられる。たとえば協力者Jは、子どもの年齢が1歳5カ月で復職後5カ月が経過していた。再就職によって、乳児健診で出会った相手とのネットワークが中断しており、現在は「再移行期」にあたる。また協力者M・Nは復職後1～2年間、「再移行期」が続いた。例えば協力者Mは、復職前に形成した母親学級や公園の「ママ友」ネットワークが復職を機に中断し、現在も復職前の「拡大期」のネットワークには戻っていなかった。また、協力者Nは、母親学級の「ママ友」ネットワークが年賀状のやりとりによって継続していたが、育児休業に形成した公園や子育て広場の「ママ友」ネットワークは、復職を機に中断していた。

就労する母親の友人ネットワークが復職・再就職によって疎遠や中断する理由として、2つ考えられる。1つは、保育所に通う就労している母親（自営で幼稚園に通う母親を除く）が幼稚園に通う専業主婦の母親と比べて時間的制約を多く受けるためである。保育所は、他の母親と交流する時間が短いため、新たな「ママ友」ネットワークを形成しにくいと考えられる。2つめは就労している母親が未来を見通して付き合いを広げないことである。實川・砂上（2010）によれば、専業主婦の母親は子どもの入園後も付き合いが継続するであろうと未来を予想して付き合っているが、就労する母親は付き合いが継続しないことを見通している。本研究の協力者もまた、“育休中だけ”の付き合いであり、“とくに「ママ友」を作りたいと思わなかった（協力者J）”と話していた。また協力者Nは、育児休業中の子育て支援の場での母親同士の付き合いについて“私自身が、こういう所へ来れるのは今だけだから、今だけの付き合いだなと捉えていました”と語った。これらの語りは、母親が子どもの成長と自分自身の就労を見通して友人関係を形成していることを示している。その見通しによって、「ママ友」付き合いの拡大を抑制している可能性が考えられる。

総合的考察

本研究では、就労している母親の友人ネットワークの形成と展開を明らかにすることを目的に、専業主婦との比較を行った。その結果、就労している母親の友人ネットワークの特徴として次の5つが明らかになった。①就労する母親が「ママ友」と出会う場所は専業主婦の母親と同様に、子どもの通う場所であり、就学までに利用する場所の数も変わらない。②保育所よりも幼稚園の方が「ママ友」ネットワークを形成しやすい。子どもの通う保育施設が幼稚園であれば専業主婦の母親が多く、保育所であれば就労している母親が多い。就労している母親に比べて専業主婦は母親同士が過ごす時間が長い。その

ため、専業主婦の母親が多く通う幼稚園の方が、就労している母親の多い保育所よりも母親同士の交流が活発になり、「ママ友」ネットワークを形成しやすい。③専業主婦の母親は、退職後の職場の友人関係が疎遠になりやすいが、就労している母親は職場の友人とのネットワークを継続する。④就労する母親は、専業主婦ほど「親役割の同質感」の高い相手を求めないため、友人に「ママ友」を求めない。その一方で「子育て」と「就労」の両方を担うことで直面する様々な課題について共感し、有用な情報を提供してくれる「子育てしながら就労する同質感」の高い相手を求めている。⑤専業主婦の友人ネットワークは「希薄期」「移行期」「拡大型」を順にたどるが、就労している母親は、離職期間中に形成した「ママ友」ネットワークが復職や再就職によって中断したり疎遠になったりする「再移行期」があり、その後「再拡大型」を迎える。また、保育所の母親は互いに交流する機会が少なく、時間も短いため、「再拡大型」を迎えるまでに時間がかかる。

実践への示唆

就労する母親と専業主婦の母親では、友人ネットワークの形成と展開が異なるため、「ママ友」をめぐる支援も異なると考えられる。就労する母親は、離職期間中は、専業主婦と同様に、多くの子育て支援施設を利用し、子育てに必要な情報を入手していた。またその期間は、就労する母親も専業主婦と同様に、子どもを遊ばせ、子育てのストレスを軽減するために、子育て支援の場を有効に利用していた。しかし、育児休業中の母親は、子育て支援の場で出会った他の母親との関係が復職後には中断することを見通して付き合いしており、専業主婦の母親のように、今後継続して付き合いしていく可能性のある「ママ友」として捉えていない。中尾・原田(2010)によれば、専業主婦の母親は、就労している母親に比べて「ママ友」付き合いを子どもを踏まえた付き合いだと感じ、「ママ友」付き合いのメリットを多く感じている。言い換えれば就労している母親は「ママ友」付き合いのメリットを専業主婦ほどには期待していないといえる。

就労する母親が求めているのは「ママ友」付き合いではなくて、むしろ「子育てしながら就労する同質感」の高い友人である。保育園や幼稚園の「ママ友」でなくても、職場の先輩や上司も子育てに有効なネットワークとなりうる。また母親の職場以外にも、例えば就労する母親同士が集う場や機会が、今後は子育てに有効なネットワークとなっていくであろう。母親の子育てと仕事の両立支援として、そうしたネットワークの形成支援も視野に入れていく必要がある。その他、本研究の協力者も活用していたように、メールやインターネットのブログなどの新しいメディアも、母親のネットワークを形成するために、今後ますます利用されていくだろう。以上から、離職期間や育児休業の取得の有無など多様性をもつ就労する母親の友人ネットワークへの理解に対応した支援が必要であるといえる。

謝 辞

本論文を執筆するにあたり、本研究にご協力くださった協力者の方々に、深く感謝申し上げます。

付 記

本研究の一部は、2011年12月に行われた日本乳幼児教育学会第21回大会において発表した。

引用文献

- 荒牧美佐子・無藤隆 2008 幼稚園入園前後における母親の育児感情と「ママ友」との関係性 日本発達心理学会第19回大会発表論文集, 611
- 亀山美津子 1998 育児支援の研究 母親, 父親, 子どものデータから 第5章 育児支援ネットワーク. 家庭教育研究所紀要20
- 實川慎子 2010 子育て期の母親の友人ネットワークの変遷—母親の捉える「知り合い」と「友だち」に注目して 乳幼児教育学研究19, 37-47
- 實川慎子・砂上史子 2009 子育て期の母親同士の人間関係の特質—母親の自己における「個としての自分」と「親役割を担う自分」に注目して 日本保育学会第62回大会発表論文集, 327
- 實川慎子・砂上史子 2010 「ママ友」付き合いの時間循環型モデル—母親の就労状況による「ママ友」付き合いの特徵 質的心理学会第7回大会プログラム抄録集, 72
- 實川慎子・砂上史子 2011 子育て期の母親同士の人間関係の特質(3)—就労状況による母親の自己の違い 日本保育学会第64回大会発表論文集, 696
- Hartup, W.W. (1992). Peer relation in early and middle childhood. In Vincent, B., Hasselt, V., & Hersen, M. (Eds.), *Handbook of social development: A lifespan perspective* (pp. 257-281). New York: Plenum Press.
- 松田茂樹 2008 何が育児を支えるのか—中庸なネットワークの強さ 勁草書房
- 中尾達馬・原田有紀 2010 「育児中の母親だけが経験する特異的な人間関係(ママ友関係)の諸特徴—ママ友の数, 子どもの数に焦点を当てて—」 日本教育心理学会総会発表論文集(52), 480
- 中村真弓 2006 幼児をもつ母親のネットワークに関する一考察 日本教育学会大会発表要項65, 114-115
- 梅木里香 2010 北斗昌さん&先輩ママが答えます! ママ友付き合いベストアンサー saita [咲いた] 4, 129-136. セブン&アイ出版
- ヤフー知恵袋 2011 ママ友ってやっぱり必要ですか? 今, 子供とプレ幼稚園に通ってます。(<http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1367156778>) (情報取得 2011/09/23)